様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	言語系コース（国語）／村井 万里子

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1．目標・計画

国語科教師を目指す学生に、教員としての実践的な基礎力を身につけさせる取り組みとして、以下のことを行う。
①授業内容：教師の指導力の基礎となる、教材研究（教材作成を含む）力と、子どもの実態や成長の瞬間をとらえる評価力ーこの2つが教師の実践力の中核であることを学生に理解させるため、授業内容を具体的・総合的に開発する。
②授業方法：学生に①を自らの演習課題としてとらえさせるため、学習者把握の演習、教材研究による発問・板書計画・作業課題づくり、模擬授業等、学生主体の作業課題を中心とする授業方法の開発を継続する。
③成績評価：学習課題を捉える「問題発見」力、作業学習のなかで自らの発見・成長をとらえる力、学習者の成長や発達をとらえる演習等を対象に、個々の授業の「ふりかえり」（1分間エッセイ）、課題レポート、記述問題等の方法で評価する。評価結果を小刻みにフィードバックし、自己認識を促す。

2．点検・評価

①学部ー「初等国語」（受講者院生：長期履修生含む）では小学生児童の作文解釈を中心に、発達をとらえる評価演習をおこなった（現在も進行中）。コア科目「初等中等教科教育実践Ⅱ（古典）において、「教材研究・授業展開」の密接な関係を学生が学べるように「評価シート」を工夫した。
②学部ーコア科目「初等②中等教科教育実践Ⅱ」は、古典専門教員とTTを組んで、模擬授業・授業参観を通して学生の主体的な学びを引き出すように努めた。しかし、昨年まで効果を挙げていた内容が今年は反応がにぶく、教員同士で短時間ながら毎度協議をもった。この「短い評価」の価値が大きい。これをもとに、来年度に向けて授業内容と教材を改訂する予定である。
③学部「初等国語」、大学院「国語科教育学研究・同演習」等で毎回課す「１分間エッセイ」や「ミニレポート」と称す課題レポートが効果を挙げている。
④プロジェクト「教科内容学開発」では、教科専門・教科教育の4名の教員の協力を得て、初めての試みとなる「初等国語」用テキストを作成した。来年度の授業でこのテキストを「参考書（副読本）」として使用してみたいと考えている。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

〇コース学部4年生の担任として、以下のことに取り組む。
・「教育実践基礎演習」を中核とする新しいカリキュラムの開発に尽力する。
・教員採用試験、就職活動、卒業研究、等に向けた「学習生活」づくりと、安全及び健康維持に積極的に支援を行う。
・コースの様々な事業に最高学年として関わる学生間の協力関係づくりを支援する。
〇ゼミナール担当教員として、国語科教員としての専門的力量形成に資する、学生の「研究」と「学習」を支援する。

2．点検・評価

〇学部4年生（担任）の教員採用状況は、昨年度に比べて厳しいものがあったが、学生はみなよく健闘した。ただし、昨年度まで維持していた教職への就職率を達成できるか、未確定である。
〇「教育実践演習」は手探り状態から完全に脱することはできなかった。意義ある活動、パフォーマンス等をさらに開発する必要がある。
〇ゼミナールの4年生（2名）、3年生（2名）は、熱心な取り組みを見せた。4年生は、卒業研究に結実するゼミ活動を積み重ねることができた。
〇大学院ゼミのうち、現職院生2名の「修士論文研究」は、主体的な「探究過程」をたどり得たと判断される。1年生（3名）は、現職院生1，M1，L2それぞれ方向・進み方が異なり、とくに半期内地研究の後に、初めて担当するL2生、M1生の指導は、ようやく軌道に乗ってきた段階である。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

〇昨年度から持ち越した「研究のまとめ」として、『対話環理論の研究』の著述を進める。
〇「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の2年目として、研究協力者教員の協力を得ながら、教科書・教材開発資料の第一稿を作り上げる。
〇大学における自らの教育実践を対象として、具体的かつ実践的な研究を行う。
〇コース全体で行う「国語科教員養成に資する共同研究」に積極的に関わり尽力する。

2．点検・評価

〇『対話環理論の研究』原稿執筆は、ほとんど進められなかった。ただし、平成24年度10月開催第123回全国大学国語教育学会「課題研究」で勤めたコーディネータの「まとめ」を今年度執筆し、「国語科教育学研究の手法－社会学・文化人類学研究との交流から得られること」の題目で論考を執筆することができたのは収穫であった。（平成26年1月8日脱稿）
〇「教科内容学」テキストのうち、第1章と2章1節を担当した。この内容には「対話環」原理の活用を促してある。学位論文をまとめる前に実践に活用することになった。（平成26年1月20日修正版脱稿）
〇所属する2つの全国規模学会のうち、全国大学国語教育学会の全国理事に選出されたが辞退した。（学会活動縮小：予定どおり）
〇コース内で計画した「科研」は不採択であったが、中堅・若手メンバーの協力により、「教科専門内容学」テキストができたことは喜ばしい。

Ⅱ－3．大学運営

1．目標・計画

○平成25年度言語系国語コース長として職務を遂行する。
○大学院教務委員会委員の職務を遂行する。
○大学全体で実施されるプロジェクト研究に参加し、研究の進展に尽力する。
○連合大学院言語系講座の業務（入試・資格審査等）に取り組む。
○教員免許更新講習（選択領域）を8月に実施・担当する。

2．点検・評価

○平成25年度言語系国語コース長の職務を、コース教員の協力を得て、1年間担当した。
○大学院教務委員会委員の職務をつとめた。
○プロジェクト研究に参加し、シンポジュウム発表を担当した。
○修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員会の新規委員に就任した。
○8月26日教員免許更新講習（選択領域）を担当実施した。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

○教育実習（学部）及び教育実践フィールド研究（大学院）等を通じて、附属学校と密接な連携を採る。
○学部・附属連絡協議会を通して、附属校園と日常的な交流を行う。
○徳島県中学校国語教育研究大会（統一大会）に助言者として協力する。
○徳島県立文書館の外部委員を務める。
○全国大学国語教育学会の地区理事・学会誌編集委員の職務をつとめる。
○日本国語教育学会地区理事、日本読書学会編集委員の職務をつとめる。
○大学院修了生を中心とする国語科実践研究の「月例研究会」を毎月1回のペースで続ける。

2．点検・評価

○教育実習では、附属小・中学校のほか、インターンシップを担当していただいた公立中学・特別支援校を訪問し、収穫を得た。このうち、公立中学校での実習生の授業を参観し、当日行った授業改善指導から、「教科内容学」執筆のヒントと材料を得た。（学生承認ずみ）
○学部附属連絡協議会を実施した。
○徳島県中学校国語教育研究大会（統一大会）は、当日台風のため、生徒の登校をとりやめ「研究授業」中止となり、研究発表に合わせて研究授業実践内容発表が行われた。研究授業・研究発表ともに、充実した成果が挙げられた。
○全国大学国語教育学会地区理事・編集委員の職務を果たした。
○日本国語教育学会地区理事として夏の全国大会分科会の指定討論者をつとめる。日本読書学会編集委員として論文査読にたずさわる。
○「月例研究会」で豊かな実践報告が見られた。若いメンバーが活躍している。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）

○「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の2年目成果として、コース教員の協力を得て、教科書を試作し、これに基づく成果報告（3月24日・東京パレスホテル）、3月25日（文部科学省）で行った。